樓門五三桐
漢人韓文手管始
五大力恋絨

名作歌舞伎全集 八

隅田春妓女容性
富岡恋山開

發行
東京創元社

昭和四十五年三月二十日　発行
（昭和四十六年十二月十五日　再版）

名作歌舞伎全集
第8巻　並木五瓶集

監修者　河竹登志夫
郡司正勝
山本二郎
戸板康二
利倉幸一

発行所　株式会社　東京創元社
代表者　秋山孝男
（162）東京都新宿区新小川町一―十六
電話（〇三）二六八―八二三一
振替東京一五六五

印刷・株式会社　金羊社
製本・株式会社　鈴木製本所
用紙・株式会社　富士川洋紙店
写真版・（株）興陽社、（株）方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

1970 Mar. Printed in Japan © TOKYO-SOGENSHA

目次

（名作歌舞伎全集第八巻　並木五瓶集）

楼門五三桐（山門）……（装置図　八木恵一）……三

漢人韓文手管始（唐人殺し）……（装置図　釘町久磨次）……一五

五大力恋縅（五大力）……（装置図　高根宏浩）……九九

隅田春妓女容性（梅の由兵衛）……（装置図　萩原勝美）……一八七

富岡恋山開（二人新兵衛）……（装置図　高根宏浩）……二三九

解説　戸板康二

校訂について　郡司正勝

山本二郎

写真と資料提供―演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

吉田千秋、郡司正勝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

楼門五三桐（山門）

解説

楼門五三桐

戸板康二

サンモンゴサンノキリ。この外題は現在行われている通例に従ったもので、元来、「五三桐」という狂言は、正しくは「金門五三桐」といい、初代並木五瓶の作で、安永七年四月、大坂角の芝居、小川吉太郎座初演の、五幕の通し狂言である。怪盗として名高い石川五右衛門を主人公とした芝居で、初代嵐雛助の五右衛門に、初代尾上菊五郎が此村大炊之助じつは大明国の宋蘇卿であった。

このうち二幕目、大炊之助館の場の返しに、南禅寺山門の場という短い幕があったが、これだけが独立して、現在の歌舞伎の演目の中に残ったわけた。

発端は、玄海灘のはなれ島に、早川高景が漂着、不思議な石碑に雁の血をぬりつけ、拓本にして見ると、唐土に一子、日本で二子を儲け、両国を三人の子に治めさせようとする宋蘇卿の叛逆が、詩になっているという場面にはじまる。

大序は島原の揚屋で、真柴久秋が兄久次に家督をゆずるため、わざと放蕩にふける所。久次に通じる筒井順慶が御用金を持って来て、さらに遊蕩をそそのかす。そこへ五右衛門が南禅寺の霊山国師に化けて来て、久秋を諫め、廓の者と禅問答のくだりがある。やがて遊女の花橘が来て香を焚くので、五右衛門は妹ではないかと思う。

久次に（久吉の）跡目宣下がきまり、順慶の思うつぼになったが、順慶が手をまわして入手したお袖判と千鳥の香炉は、霊山が手に入れる。順慶が気がついてあとを追おうとするのを、霊山は切り殺し、手下に金箱を持たせ、「南無あみだぶ」とつぶやきながら入る。これを、「南無あみどうふ」と直したのは、役者の工夫で、南禅寺の前にある豆腐屋を、洒落たのである。

西沢一鳳の、「伝奇作書」（続の下）に「古名人役者に妙ある話」を見ると、この初演の時の島原の引込みで、雛助はわざと頭巾をとらず、紫の衣の尻をまくり、紅のふんどしを見せ石橋の囃子で、その尻をまくったまま悠々と入ったが、弟子がのちにまねても、師匠のイキにはとても及ばなかったとある。

この幕で雛助が頭巾をとらなかったのは、のちの山門で

大百日のかつらを初めて見せる用意だったのであるが、以後の俳優は、序幕でもう頭巾をぬぎ、三代目歌右衛門の如きは裾を引きあげて、衣の裏の黒びろうどを下に着込んだ四天の裾を見せて六方をふんだりしたらしく、三代目三津五郎は、からみに頭巾をとらせ、頭へ手をあてて「南無あみどうふ」とつぶやいて退場したとある。

揚屋の次が久吉の館で、久次は短慮のため跡目にはすえられないということになり、此村大炊之助が身柄をあずかって、家へつれ帰る。

二幕目は、まず此村大炊之助の館で、久次に命ぜられて、島原の遊女で久秋のなじみの九重が、奴に責められている。そこへやつした姿の久秋が来、九重の母の蛇骨婆が来る。乞食の老婆である。久次は久秋を乞食の娘といい交したといってとがめる。この婆の出現は久次にたのまれた狂言だったということが八田平の機転で暴露する。

そこへ高景が上使として来て久次の罪条をあげ、大炊之助は諫言のため切腹するといい、もう一度久次を諫めて、その腹を刀で刺す。高景と久秋が去ったあと、大炊之助は久次に、これは計略で、秘薬を用いれば傷は全治すると告げ、今こそ天下は久次のものになったというので、久次は大炊之助に旗を渡す。旗をうけとった大炊之助は本心をあらわし、日本はわがものとうそぶく。そこへ高景と久次があらわれ、久次の暴逆も、大炊之助じつは宋蘇卿の野望を見やぶるためのはかりごとであったと告げる。さっきの蛇骨婆も、身なりをととのえて出て来て、八田平を宋蘇卿の腹心順喜観と見ぬく。大炊之助は奥の亭屋体で、唐装束となり、香を焚くと、掛け物の鷹が絵からぬけて飛び去る。そのあと順喜観の八田平がかけつけ再会を約して去り、大炊之助は、高景から、さっきの旗がにせ物ときいて、大あばれになる。そのあと八田平の立ち廻りがあって、南禅寺の山門の場へ変わる。この場面は、昭和四十二年十月の新橋演舞場で、市川猿之助の「春秋会」公演が行われた時、復活された。

この大炊之助の館は、丸本にありそうな、虚々実々のトリックの応酬で、観客も一しょにだまされる、手のこんだ場面である。

南禅寺山門は、大薩摩がすむと、浅黄幕を切って落す。正面、山門の楼上に大百日のかつら、どてらを着た五右衛門がいて、歌舞伎のファンなら誰でも知っている「絶景かな」のセリフをいう。

上手の日覆から片袖をくわえた（絵ぬけの）鷹が出て来て欄干にとまるのを、手もとへ呼びよせ、片袖をとり、長ゼリフがあり、「このうらみ晴らさでおこうか」というと、左右から捕手が一人ずつ出て組みつく、一寸立ち廻りがあ

り、一人が上手うしろむきにねじ上げられ、一人が下手正面むきに組み伏せられた形で、せりの鳴物で、山門の大道具がそのまませり上る。

下から一しょに巡礼姿の久吉がせり上って来る。（この間に五右衛門がどてらを脱ぐことがある）久吉の「石川や」のセリフで、上の五右衛門が「ヤッ」と見下し、手裏剣を打つのを久吉が柄杓でうけとめる、この時「巡礼に御報捨」という。この右手をあげた形と、上から五右衛門が右足を欄干にかけ、刀に手をかけて見おろす天地の見得で幕になる。ただそれだけの短い幕だが、せり上げという歌舞伎独特の舞台機構を利用し、花に包まれた場面の美しさ、音楽のおもしろさ等、端的に視覚聴覚にうったえて来る点で、人々から愛された歌舞伎のレパートリーに残った一幕劇である。

いつの場合も、この「山門」は、五右衛門と久吉に扮する俳優が大立者であることになっている。昭和初年五代目歌右衛門の五右衛門、初代鴈治郎の久吉の顔合せ（昭和六年十月歌舞伎座）が、その意味では代表的なものといえる。錦絵の二枚続きというような二人でなければ、もともとナンセンスなこの芝居は、無意味なものとなるであろう。

歌右衛門は女形であったが、五右衛門は家の芸というので、明治三十四年五月に、福助から芝翫になった時の襲名披露にも、この「山門」を出し、五代目菊五郎が久吉をつきあっている。

その後明治四十四年六月、新築の帝劇で、先代団蔵の演じた五右衛門が古典的なマスクの見事さで、団・菊死後の東京劇壇に、喧伝された。これは、戦後、名優のすくなくなった歌舞伎界が、二代目延若の「山門」を珍重したのとよく似ている。延若はこの五右衛門以後間もなく死んだが、その時映画におさめたフィルムは保存されて残っている。その時久吉を演じた寿三郎も、故人となった。

さてこの「山門」が代表的な場面だったので、「金門五三桐」を「楼門五三桐」とするのが寛政十二年以来原則となったが、これは元来、太閤の五三の桐の金紋をちょっと避けて紋を門にしたのが作者の意図なのだということだけは、書いておく。

ふたたび本文に帰ると、「五三桐」三幕目は、大手並木松原で、通りかかった公卿の装束を五右衛門の手下が追い剝ぐ所で、公卿の世尊寺中納言を三枚目にしているのがおもしろい。これはいわゆる「小幕」という、おかしみの場面で、今でいえば、カーテン前という所であろう。

近年大阪で演じた、寿海の「山門」の時は、文字通りカーテン前の浅黄幕のそとで、この場を見せた。

四幕目の大仏餅屋は、当時の習慣で、愁歎場にしなければならないので、五瓶は、精々泣かせる趣向を立てている。すなわち、島原にいた花橘を実家の餅屋にたずねて来た采女が、一旦は兄妹で契ったものと思い込み、死のうとする所へ母のお幸があらわれ、じつはとりかえ子で、二人は兄妹ではないといい自害する所があったり、早川高景が五右衛門をとらえに来たのを、五右衛門の聟の惣右衛門が身替りに首をさし出し、五右衛門の助命をたのむ所があったりするのが、それである。幕切れに五右衛門が捕手に向い、手裏剣を打つと、舞台一面に網がかかる。

五幕目は桃山御殿で、兜頭巾忍びの姿の五右衛門が種ケ島をもって花道からあらわれ、居ねむりをしている大名の前を通って、寝ている久吉を刺そうとすると、五右衛門の懐で、千鳥の香炉が音を立てる。久吉が起きて五右衛門と問答になり、南禅寺で五右衛門の打った手裏剣を打ち返し、久潤を叙す所がある。

やがて五右衛門の女房お律が顔が似ているので、久吉の奥方に化けて近づき、久吉を刺そうとして失敗、入り込んだ順喜観は久秋を切るが、やがて五右衛門の前に、その順喜観があらわれ、久秋は身がわり、自分は本物の順喜観を殺し、千鳥の香炉をとり返すために唐人に化けていた加藤虎之助であると名のる。五右衛門はお袖判を采女に渡し、久吉と後日を約して別れる。

これもまた二幕目と同じく、複雑に入り組んだ筋だが、最後は型通りの詰め寄りで、あっさり大団円となっている。

別に辰岡万作が寛政八年四月の大坂角の芝居に書きおろした「艶競石川染」という芝居がある。

この作では、五右衛門は宋蘇卿の子ではなく、四王天但馬守の一子ということになっていて、天王山の石の下にあった巻物を読んで忍術を覚え、桃山御殿に忍び入り、つづらからぬけたり、そのつづらの中に奥女中の滝川を入れ、背中に背負って花道へゆくのを、公卿が見送って騒ぐと、「つづら背負ったがおかしいか、こわい親父は見えぬか」というセリフは有名である。

石田の局のくだりは、それと同じ二幕目の一部分で、石田三成を女にした趣向である。石田局は「五三桐」の大炊之助のような謀反を企て、事あらわれ切腹する。この女は、四王天但馬の妻で、五右衛門の実母という設定だが、そこに「五三桐」の八田平を矢田平としてからませている。

近年では、三代目梅玉が、前名福助から改名した時、道頓堀の中座で、この石田の局を演じ、矢田平に政次郎改め福助が扮している。能をとり入れることは、今考えるよりも、むかしは大事だったので、これは大変な見せ場であっ

たわけだ。

初演は石川五右衛門と石田の局を、嵐小六（前名初代雛助）が演じるはずだったが、総ざらいに石田の局が「熊野」を舞うくだりで、小六が急死したので、息子の二代目雛助が、五右衛門と石田の局を演じた。

のち、この狂言の石田の局の所だけが、江戸に移入され、天保二年に中村芝翫が演じ、七代目団十郎、五代目彦三郎、九代目団十郎等が演じている。昭和になってから、大阪で三代目梅玉が演じたのは、めずらしい例である。

歌舞伎の五瓶以前に、石川五右衛門は、浄瑠璃の方で、さかんに活躍した。

すでに古浄瑠璃にも出て来ているが、次いで近松門左衛門の「傾城吉岡染」に登場、元文二年七月豊竹座初演の、並木宗輔作「釜淵雙紋巴」には、主人公として、人間味の濃い盗賊の生態が描き出されている。

今では、この中の巻の五右衛門住家の「まま子責」、下の巻の「藤の森」「釜煎」を通してまれに出すことがある。近年では、昭和六年九月に歌舞伎座で、初代吉右衛門が演じた。

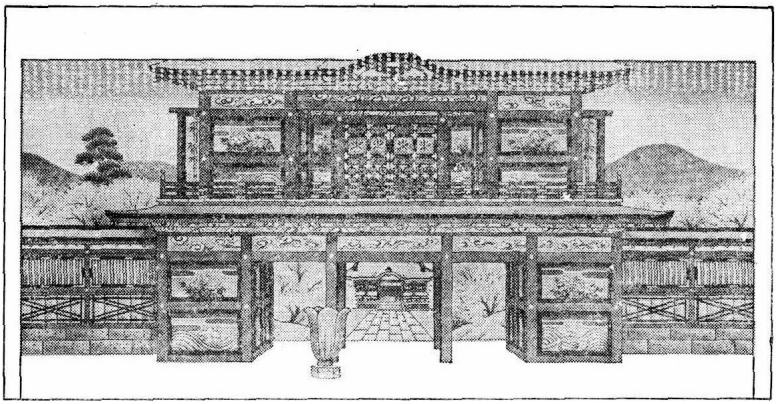
次に明和四年十月竹本座に、並木正三が書きおろした「石川五右衛門一代噺」があり、五右衛門は主家を再興させる義賊で、釜煎の前に特赦にあうことになっている。

寛政元年二月豊竹此吉座初演の、若竹笛躬、近松宗七、並木千柳の「木下蔭狭間合戦」は、木下當吉（秀吉）と五右衛門を、盗賊の手下であった猿之助、友市として対立させ、二人の運命がそれぞれたどる経路を描いている。七冊目の「竹中砦」がその當吉の見せ場、八・九冊は五右衛門の持ち場で、九冊目の「壬生村」で父の治左衛門を訪れた五右衛門は、義妹小冬の死後、自分の素姓が武士の胤とわかるので、手下の奪って来た装束を着てにせ勅使となって、足利の館に乗り込み、當吉と術くらべがあり、後日を期して別れるという筋である。

石川五右衛門は、史実のはっきりしない人物だが、つねに、秀吉が、何らかの形で、その対照に描かれているのはおもしろい。そして、その二人の顔合せを、最も簡素な形で示したのが「山門」といえばよかろう。

なお、つけ加えると、帝劇で団蔵が五右衛門を演じた時、先代梅幸の久吉は、長上下で出たが、そういう型もあったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



南禅寺山門の場

南禅寺山門の場

役名　石川五右衛門。真柴久吉。深井与九郎。所化。捕人。

本舞台、うしろ桜の盛り、仏堂伽藍を書き割りたる道具幕。上下、桜のはやし山組の張物にて見切り、すべて南禅寺境内の体、禅の勤めにて幕あく。

ト向うより、深井与九郎、野半天、股引、大小、わらじ、黒四天の捕人二人を連れ、あとより同宿二人、つき添い出て来り、たゞちに舞台へ来り、

深井　コリャ、其方たちは当院内の所化どもか。

○　さようにござります。すなわちツン典、

△　珍頓と申しまする、

両人　所化どもにござりまする。

深井　イヤ、三味線のような名ではあるわえ……。おふれの趣き申し聞かさん、承れ。……このほど、石川五右衛門という盗賊、五畿七道を徘徊なし、貴人高家へ忍び入り、衣類器物に目をかけず、たゞ金銀のみ奪い取るは、

まさしく只の盗人ならず、さっするところ、先達て亡びたる、宋蘇卿の余類か、又は先年滅亡せし武智・柴田が残党にて、叛逆むほんの企てあって、軍用金を集めんためか。何にせよ、油断ならざるこの時節、モシ当院内へ込み入らば、早鐘をもって合図せよ、さっそく身共は……、参らぬが、この者どもを遣わすであろう。

捕㊀　ア、モシ〳〵、お頭さま。その五右衛門は、名におう曲者、

㊁　なか〳〵もって、われ〳〵の手際では、召し捕れませぬ。

深井　たわけ者め、たかのしれたる盗賊の張本、何ほどのことあるべきか。

㊀　さようなら、あなたさま只一人でからめ捕り、

㊁　高名手柄をなされませ。

深井　そりゃ、いうまでもない、安い事だが残念ながら、身共、饅汁と盗賊は一生断物だわえ。

両人　何をおっしゃります。

深井　イヤ、まだ〳〵申し聞かす事がある。その五右衛門をからめとれば、莫大なる御ほうびを下さるぞ。

㊀㊁　それはありがとうござります。

深井　コレ〳〵、たゞ貰っては相ならぬ。この洛中洛外は、かくいう深井与九郎がかゝり、かように日夜触歩かば、たとえ何者が召し捕ろうと、褒美の金は山分けだぞ。

㊀㊁　へイ〳〵、よろしゅうござります。

深井　よいか、よいな。よければきっと申し渡したぞ。家来、参れ。

ト右の鳴物にて、皆々ついて上手へ這入る。鳴物打ち上げ、大薩摩になり、

大薩摩へそれ緑林白浪の、堅き言の葉和らげて、昼を夜なる歓楽は、盧生が夢のそれならで、瑞竜山の楼門に暫し栄花の夢見草、花の白浪青柳の、翠の林色まして、春の詠めや勝るらん。

ト鳴物打ちあげ、道具幕を切って落とす。

本舞台、一面に山門の上。扉前、高欄、たる木、象鼻、極彩色の組物。山門の左右、一面に桜の盛り、蹴込みの所、霞にて隠し、高欄の真中に、石川五右衛門、百日かつら、どてらにて、煙草を呑みながら、四方を詠め居る見得。本釣鐘、音楽にて道具おさまる。

五右衛門　絶景かな〳〵。春の詠めは価千金とは小さなたとえ、この五右衛門が目からは万両。もはや日も西に傾き、誠に春の夕暮の桜は、取りわけ一入〳〵。ハテ、麗らかな眺めじゃなア。

トこの時、風の音になり、さしがねの鷹、片袖をつか

み、飛び来り、高欄にとまるを見て、

ハテ、心得ぬ。アノ鷹が、我を恐れず羽を休むるは、

ト思入れあって、煙突をほうる。鷹これに恐れて、片袖を置いて飛び去る。五右衛門、件の片袖を取り上げ見て、

ヤ、血汐をもって認めし、この片袖は。ハテ心得ぬ。

トよく見て、

五右衛門　実川延若

大明十二代神宗皇帝の臣下、左将軍朱蘇卿、死後に残す遺言の事、……ムウ。

トよろしく思入れあって、

往昔、神宗皇帝、この日本の幕下につけんと、使節をもって願いしを、久吉、使節を捕虜となし、再び本国へ帰さざりしゆえ、皇帝の無念散ぜんため、我は子を乳人に預け、密かにこの土へ渡海なし、箱崎の地に世を忍ぶうち、計らずも、和国の女にかたらい、男女二人を儲く、唐と和朝に三人の我が嫡子を世に立てんと、江北一株の枳、江南二株の橘、すべて金錠を掛け、扶桑にはびこると、玄海が嶋に石碑を建てしを、さとくも叛逆むほんとさっし、真柴久吉がために相果て終わんぬ。その砌、二人の男子は、母もろともに死を退れ、もし天運つきず世を忍び、兄弟この土に存命なさば、わが筐に残し置きし、蘭奢待と名づけし名香を証拠に名乗り合い、父の怨敵、真柴久吉を討ちとり、修羅の

妄執はらさせくれ候えかし。……

トよむことあって、

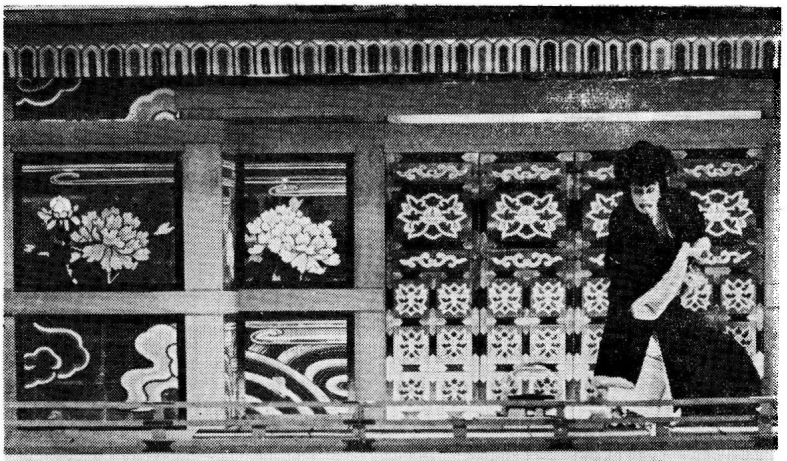
ム、この遺書に記したる蘭奢待の名木所持せしわれは、宋蘇卿が忘れ記念であったるか。我、幼き時より父母に別れ、甄に孤児となりしを、武智光秀殿の養育に預かり、成長なして名も惟任左馬五郎と呼ぶ。しかるに、光秀どの、春永を討ち取り、四海を掌握するといえど、はつか三日にして、久吉がために亡ぼされ、終に無念の死をとげ給う。高恩請けしわれなれば、光秀殿の弔い軍、真柴久吉討ちとらんと、殉死を止まり世を忍び、いま石川五右衛門と名乗る今の今まで、我が父はいずくの誰と白浪の、強悪非道の身ながらも、明暮心に掛かりし素姓も、この遺書にて、わが父は宋蘇卿としれたる上は、養父といい実父といい、久吉がために無念の最期、鷹のしらせは親子の導引、思えば蘭奢の名香も、死後の筐となったるか、チエ、……。

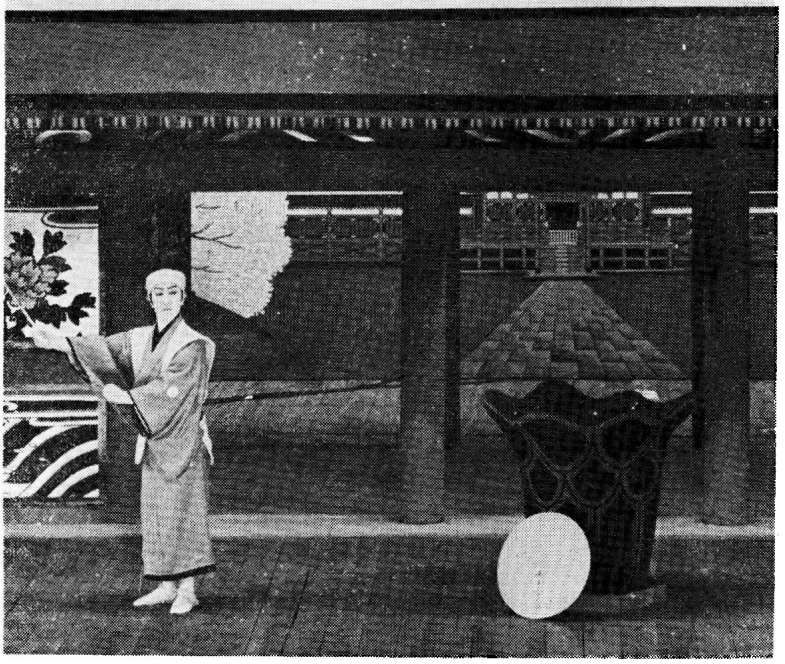
山門がせり上がってくる瞬間……。

トホロリと思入れあって、

遺恨重なる真柴久吉、たとえこの身は油で煮られ、肉はとろけ、骨はしいびしおになるとても、父の怨敵、今にぞ思いしらしてくれん。

ト高欄へ足を踏みかけ、キッと見得。これをしらせに鳴物になり、この道具せり上がる。





久吉　三代目 市川左団次　　五右衛門　十一代目 市川団十郎

本舞台、せり上がる。山内の下になり、前に蓮の葉の手水鉢、こゝに久吉順礼の拵えにて、菅笠、ひしゃくを持ち、せり上がり、山門の柱へ、石川やの歌を書くことあって、前なる手水鉢へ目をつけ居る。この見得にて道具おさまる。ト久吉、山門の上を見上げ、

久吉　石川や浜の真砂は尽きるとも、

五右　ヤ、

久吉　世に盗人の種は尽きまじ。

五右　なんと、

トキッと見おろす。

久吉　順礼に、……

トこれにて五右衛門、エイと小柄を手裏剣に打ち、高欄へ足をふみかける。久吉ひしゃくにて請けとめる。双方、見合わせ、柝のかしら。

御ほうしゃ。

トキッと見上ぐる。寺鐘、風の音にてよろしく、

拍子幕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com